

だれもが育児不安を覚える時代の「乳幼児健診」のありかた

益邑 千草

○わが国の乳幼児健診制度

現在、我が国で実施されている乳幼児健診、すなわち、乳児（生後1年未満の児）および幼児（満1歳から小学校就学までの児）を対象とする健康診査（健診）には、公費で実施され受診者の自己負担がないものと、受診者が自己負担で受診するものがある。

前者については、その根拠となる法令は母子保健法である（表1）。現在、健康診査を含む母子保健事業の実施主体は市町村であることから、乳幼児健診は各市町村で地域の実状に応じて実施されている。母子保健法およびその関係法令・通知に基づく乳幼児健診の概要を、表2に示した。

後者については、生後1か月健診などがある。出産した医療機関で産婦としての受診と同時に受けることが多く、比較的受診率の高いものである。自治体によっては公費の補助があるところもある。

○乳幼児健診が直面している問題

乳幼児健診は、今、社会情勢の急激な変化への対応を迫られている。

1. 発達健診等の2次的健診のあり方や健診後のフォローアップ体制等を含めて地域における母子保健システム全体がよりよく機能することが求められている。

母子保健法の改正により、平成9年4月に基本的な母子保健事業が市町村へ移管され、政令市・特別区以外の市町村ではこれを機に、1歳6か月児健診だけでなく、乳幼児健診全体を運営することになった。乳幼児健康診査は平成12年度から一般財源化（地方交付税措置）され、市区町村の実状に応じて実施さ

れている。

2. 少子化がもたらす経済的・社会的な影響を受け、乳幼児健診は「疾病志向型」から、「健康志向型」へ転換すべきだとされている。

1) 少子化で、健診の対象児が減少したため、予算が減額され、集団健診の開催回数が減るなどの影響が出ている。

2) 少子化で、小児科の患者数が減少し、小児科医療へ深刻な影響を与えている。

小児科外来・病棟の縮小・廃止、高齢化等による小児科専門の開業医の減少、医学部生の小児科志望者の減少などである。

このため、個別健診の委託先の確保や集団健診の人的資源の確保が困難になってきた。

3) 少子化の影響が、育児の環境に対して社会的・心理的影響を及ぼしている。

核家族化、共働き家庭の増加、遊び場の減少などにより、子どもの心の問題、母親の育児不安の問題、さらに小児虐待の予防・早期介入など、家族関係、家庭を取り巻く地域環境に関わる個別的継続的でもかも広域的な課題への対応が必要となっている。

このため、乳幼児健診は「疾病志向型」から、多様なニーズに応ずる「健康志向型」へ転換すべきだといわれてきた。もっとも、疾病や異常の早期発見という健康診断の役割がなくなったわけではなく、いわば質的に異なる2つのタイプの健診を並行して実施する必要に迫られている。

すなわち、1次健診の受診者には「広く浅く」対応し、特別のケアを要する児を見落とすことなく把握し、グレーゾーン（いわゆる境界児）やハイリスク児に対して手厚い対応をするというのが従来の健診の図式である。

この大枠を維持しつつ、小児虐待の予防や育児不安への対応を考慮し、子どもたちがそれぞれの個性を活かし、伸び伸びと育つように助言・指導していく必要がある。

しかし、これは一人一人に時間をかけ「広く深く」対応することを意味する。「一見大丈夫そうな親子」にも気を配り、母親*の悩みをうまく聞き出す必要がある。

その結果、子どもよりも母親の状態から、あるいは親子の相互関係から、親

と子をフォローする必要が認識されたりし、そのための経過観察の場など、新たな支援体制を整える必要が生じてきた。

プライバシーを守りながら健診結果を活用し、広範囲の関係機関と連携を図ることも必要となり、コーディネーターとしての役割を誰が担うかという大きな課題も各地域で現在も模索中である。

＊注：健診の際に乳幼児に付き添って来る保護者は、必ずしも母親だけではないが、母親でない場合も含めて「母親」とした。

すなわち、離別等で母親がいない、就労や病気療養中で母親が付き添えない等、様々な理由で、父親や祖父母、他の親類や保育担当者（施設入所児等）らが付き添って来る場合がある。

「育児不安を訴える母親」などの表現も、必ずしも母親だけでなく父親や祖父母など主な保育者を含むものとする。

○乳幼児健診の現状と問題点

現在、乳幼児健診は約3,200の市区町村が、それぞれ地域の実状に応じて独自の方式で実施している。

1. 乳幼児健診の実施状況をインターネットで把握

インターネットで全国約90カ所の市区町村の乳幼児健診の実施状況を調べてみた。一般健診については、表3、歯科健診については、表4にまとめた。

近年、地方自治体がインターネットのウェブサイト上でいわゆるホームページ（HP）を開設し、短期間で更新することにより、住民に最新の生活情報を提供するようになった。24時間、必要な情報（例えば救急診療の当番医）を検索でき、地図なども得られる利点がある。

ほとんどの市区町村がHPを作っており、その大部分が、乳幼児健診の時期や問い合わせ先等の情報を載せている。中には個別通知をすると断りながらも、実施期日、実施会場または医療機関名簿、健診の内容、当日の持ち物など詳しく載せているところもある。

インターネットによる情報提供は、乳幼児を持つ親にとって有用である。幼

い子どもがいると外出や電話での問い合わせなども意のままにできないため、深夜でも使える点は便利である。妊娠期から育児期の夫婦は住宅事情や転勤などのため転居する率が高く、また里帰り分娩の場合もあり、離れた場所から予め健診の情報を得る必要がある。

パソコンや携帯電話でアクセスする以外に、公共施設や駅などに置かれた検索用の端末で、公的な事業や施設の情報が得られる場合もある。これからお産をしようとする世代はほぼ100%インターネットによる情報把握ができると考え、インターネットによる詳細な情報提供をする一方、アクセスする手段のない対象家庭への配慮も欠かせない。

重要な点は、従来の情報提供手段、すなわち郵送等による個別通知や広報誌などと併用することである。情報提供の機会が多い方がよい。できるだけ早期から療育を始める方がよい場合や、命にかかわるような虐待を防ぐ場合など、乳幼児期、特に乳児期の1か月、1週間の時間差は影響が大きいからである。

2. 乳幼児健診の実施時期と転居などへの対応

乳児健診については、ほとんどの市区町村が実施要項に勧奨されている生後3～4か月に健診を行っており、生後1年間に計1～2回受診の機会のあるところが多い。

乳児健診は、顎定やおすわりなど、発達診断学的なKey monthである4か月、7か月、10か月に行った方がよいといわれているが、現在のところ市区町村によってまちまちである。

1か月児健診は、新生児期の異常の早期発見とともに、母親の育児不安に対応する上でも重要な月齢であり、公的健診として支援している自治体もある。地域によっては12か月前後のお誕生健診、2歳児健診などが公的健診として行われている。

子どもの心の問題や育児不安への対応などを考えると、乳児期には少なくとも3回、できれば回数を多く、幼児期には2歳、3歳……と1年ごとに行うのが望ましいのではないだろうか（図1）。

至急に対応が必要なのは、転居により「健診を受け損なう可能性」をできるだけ減らすことである。

健診の対象者は、法の条文では1歳6か月児は「満1歳6か月を超え満2歳に達しない幼児」、3歳児は「満3歳を超え満4歳に達しない」となっている(表1)。

しかし、ウェブサイト上の公式ページを詳しく見ると、集団健診の場合で、1歳6か月児健診では、1歳6か月の時点で受診するところから、1歳10か月で受診するところ(名称も「1歳10か月児健診」)までばらつきがある。

1歳6か月から受診の例(図2)、1歳10か月健診としている例(図3)

同じく、3歳児健診では、3歳0か月から3歳9か月までばらつきがある。

3歳0か月から受診の例(図4)、3歳9か月から受診の例(図5)

子どもの発達は幼児でも1か月間でめざましいものがあり、3歳0か月と4歳近くでは、発達状況もチェックポイントも違ってくる。3歳9か月に実施している自治体ではその理由を「検査方法を理解して、怖がらずできるようになります」などとウェブサイト上で説明している(図5)。聞き分けがよくなることは利点であるが、受診者側から見ると、3歳児健診としての精密検査を受ける期間が短くなる。

更に問題となるのは、実施時期が遅い方の自治体から、早い方の自治体へ転居した場合には、健診を受け損なう可能性があることである。もちろん保護者が申し出れば、規定の月齢までは受診できるが、保護者が個別通知を期待して待っているうちに対象月齢を過ぎてしまう恐れがある。

転入届の窓口で必要な情報を提供し、受診もれを防ぐべきである。だが、自治体により実施時期がこれだけ異なるという事実を健診の担当者が把握していない例、気づいていても住民票の管理をする部署に伝えるというしくみになっていない例も実際にあった。全国的には、受診もれの大きな原因になっている可能性がある。

3. 乳幼児健診の実施方法

健診の実施方式としては、大きく分けると2つの方式がある。

- ① 保健所(政令市・特別区の場合)や保健センターなど(市町村の場合)で行う集団健診
- ② 医療機関に委託して行う個別健診

かかりつけ医の診療所で受ける場合と、病院で受ける場合がある。

1歳6か月児健診および3歳児健診は集団健診で行っている自治体が多いが、乳児健診については、時期とともにまちまちである。集団健診のみのところ、個別健診のみのところ、集団健診と個別健診を時期により組み合わせているところ、並行する時期があるところなどがある。

医療機関への委託で、市町村で委託しているものと、県で委託しているものを併用している自治体があり、2種類の「受診票」が使える委託医療機関の範囲が異なっているため煩雑になっている。

集団健診と個別健診は各々長所と短所がある（表5）。

少子化社会では、個々の子どもに継続的にからだと心の健康状態をチェックするため、個別健診の方が望ましいといわれているが、実際には双方とも人的資源の確保の問題が大きい。

乳幼児の健診に慣れたかかりつけ医に継続的に診てもらえる点は、個別健診の長所であるが、適当な委託先がない地域もある。集団健診でも保健所の常勤医が小児科医で、同じ医師が診察することもある。委託先が病院の場合など、栄養士や心理指導員などチームで健診を担当したり、グループ指導を取り入れたりして、集団健診の長所を取り入れることができる。

乳幼児健診に求められている「広く深く」つまり対象者全員にもれなく多角的で十分な対応をするには、集団健診か個別健診どちらかを選ぶのではなく、両者の長所をうまく組み合わせる形が望ましく、できれば同じ月齢、年齢でも、どちらかもしくは両方を（and/or）受診できるのがよい（図1）。

4. 歯科健診について

歯科健診においても実施状況はかなりばらつきがある（表4）。

歯科のホームドクターをもち、歯科として必要な定期健診や歯みがき等健康教育を受け、必要に応じて治療を受けるというように、歯科においても継続的なチェックは生涯続くはずである。

一方、歯の健康は全身の健康と密接に関連しているため、キーポイントとなる年齢で、一般健康診査と同時期に歯科健診を受け、栄養指導やしつけ、生活リズムなど栄養士や保健婦の指導を受けることも重要であるため、個別健診と

集団健診とを併用するのがよいのではないだろうか。

5. 乳幼児健診の内容について

前述のように、乳幼児健診の実施時期と実施方法は、非常に多様であることがわかった。

健診の内容については、母子保健法関係法令・通知に原則が示されているが、月齢・年齢に応じて、また地域の要請・実状に応じて、独自の内容を加えて実施されている。時期にもよるが、耳鼻科の診察、視能訓練士による視力検査、離乳食・幼児食の試食、親子遊びの指導など多彩な内容となっている。一方では、診察医を含め、心理相談担当者など専門職の人材確保が難しく、内容の充実に苦慮しているところも多い。

詳しい内容については、実地に見聞した健診の検討を含め、稿を改めて報告したい。

○子育てにおける個別の問題への対応

近年、いわゆる子どもの心の問題への対応が求められている。また、時間をかけて母親に話を聞くと、子育ての過程では多かれ少なかれ、だれでも不安を抱えている。

それらは、場合によっては一言で誤解が解けるものもあり、家族全体あるいは複数の関係機関による長期のサポートが必要になるような複雑なものまである。

乳幼児健診において、そのような個別の問題をどう取り上げるのか。どこまで取り上げるのか、たいへん難しい問題である。

身体的には大きな問題がない、もしくは対応のしかたがある程度わかっているが、しかり方やしつけのしかたがわからない、子どもの発達に応じた遊び方がわからない、など、身体発育のチェックや疾病・異常の発見が中心の健診では対応が不十分になりがちであったことである。

母親が育児に不慣れで、しかもふだんは周囲から適切な助言が得られにくい、

多かれ少なかれ育児に不安を感じている、など、育児の環境と母親の心の問題への対応が必要であり、親と子をいっしょに継続的に支援していく必要がある。

1. 子育ての個別の問題への対応と健診方式

子どもの心の問題には、夜泣き、指しゃぶり、おねしょなどよくある症状で、器質的な疾患のチェックが必要なものも含めて、子どもの心理を理解した母親の対応が求められるものや、「落ち着きがない」「すぐにかんしゃくを起こす」「ひとり遊びばかりする」など、子どもの情緒や心理、行動や社会性などに関する訴えで、専門的な診断が必要かどうかの判断と家庭での対応、集団保育などフォローアップの場の考慮などが必要なものなどがある。

母親に対しては、個別に時間をかけてじっくりと話を聞き、母親の不安を取りのぞき、子どもへの対応を具体的に指導する必要がある。子どものささいな行動を気にする背景には、子育ての不安を本人が自覚していないことも多く、その状態を解きほぐすには、継続的な支援が必要となる。

子どもに対しては、プレイルームでできるだけ緊張を解いた状態で遊ばせ、母親とのやりとりやおもちゃや他の子どもへの関心の持ち方などを観察したりし、家庭での育児の様子を推察したり、場合に応じて発達テストや心理テストなどを実施する必要がある。

従って、個別的で継続的な相談・指導ができる個別健診が対応に優れている点もあるが、プレイルームなどの広い場所があり、専門の心理指導員がおり、お遊び教室や育児学級などの紹介がしやすいなどの点で集団健診の方が対応しやすい場合もあるであろう。

いずれにしても、子どもの発達を総合的に診ることができ、母親の相談に応じることのできる小児科の専門医などの人材が、地域で得られるかどうかにかかっているといえる。

一般的な対応のしかたとしては、かかりつけ医での継続的な相談を縦系にし、必要に応じて、また節目の年齢で、公的機関での集団健診を横系にして、連携を図っていくという方式が考えられる（次項参照）。

2. 乳幼児健診の充実と特に小児虐待の予防・早期介入について

子育てにおける個別の問題に対応するという観点から、望ましい乳幼児健診

の実施方法を図1に掲げた。

従来、行政は無駄を省き、効率よく過不足なく実施することを求められてきた。以前なら健診回数を増やし、集団健診と個別健診を併用して選択できるメニュー方式にするなどという提案は、限られた予算の中では積算だけでも難しいとされたであろう。

また、回数を増やしたりして手厚くすることは、保護者にとって、不安に思ったときにすぐ相談できるというプラスになるか、「受診しなくては」というストレスが新たな不安を産む点でマイナスになるか、常にジレンマに陥ることになる。

それでも、乳幼児健診を受診する機会はできるだけ多くし、受診しやすい条件を整えるべきだと考えられる。

ひとつには、育児をする上で常識的なことを知らない親があまりにも多く、しかもうまく聞き出してもらって初めて不安を自覚するようなどころまでできていることである。

もうひとつは、小児虐待の疑いのあるケースを発見する機会として、医療機関の受診、乳幼児健診の受診が重要であることである。

虐待をしている親の行動として、休日や夜間に被虐待児を診察に連れてくることが多いといわれている。乳幼児健診については、共働き家庭など平日に休みが取りにくい場合に受診しやすいように「休日健診・相談事業」がいくつかの市町村で実施されている。

看護休暇と同様、健診のための休暇が保証されるべきだという指摘や、休日・夜間診療の当番と併せて地域の小児科医の負担が重すぎるとの批判がある。しかし、虐待をしている、あるいはその恐れのある親が「健診というのは受けなければいけないらしい」と思い、休日なら子どもを連れて来るかも知れないと考え、休日健診が実施できる条件を整えることは非常に重要である。

健診に費用をかけることで、乳幼児の心身両面の健康を保持・増進することができれば、その効果は単に乳幼児の医療費が少なくなるというだけでなく、その子の一生を左右する重要な影響を及ぼすことになる。

○今後の検討について

乳幼児健診は、市区町村によって様々な条件下で実施されているが、母子保健事業全体、また乳幼児の健全育成に関わる事業全体の中で、最良の方法で実施されているのかを評価し、見直していくことが必要である。

受診率のような量的評価だけでなく、その効果を質的に評価するためには、健診の実施状況を具体的に把握する方法と、同時に評価方法が検討されなければならない。

特に、受診者の個別のニーズを満たしているかどうかは、受診者の満足度で評価されることがあるが、母親の子育てに対する不安は本人が自覚していないものもあり、きめ細かい対応により真の満足を得られるかどうかまで、いろいろな視点から総合的に評価する必要がある。今後の課題としたい。

参考文献

厚生省児童家庭局母子保健課監修：母子保健行政法令・通知集、平成9年、母子衛生研究会、1998

厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課監修：わが国の母子保健、各年度、母子衛生研究会

厚生統計協会：国民衛生の動向、各年、厚生統計協会

日本小児科学会他編：子育てに役立つ健診ガイド（3～4か月編）、日本小児医事出版社、1998

日本小児科学会他編：心と体の健診ガイド ― 幼児編、日本小児医事出版社、2000

福岡地区小児科医会乳幼児保健委員会：乳幼児健診マニュアル、医学書院、1997

益邑千草：これからの乳幼児健診を考える ― 1歳6か月児健診は整備点検の時期です、チャイルドヘルスVol.3：No.4、4～8、診断と治療社、2000

益邑千草：乳幼児健診の現状と問題点、周産期医学Vol.32：No.5、617～623、東京医学社、2002

インターネットによる地方自治体の情報収集は、全国自治体マップ検索を用いた：
<http://www.nippon-net.ne.jp>

表 1 健康診査に関する母子保健法の条文

(健康診査)

第12条 市町村は、次に掲げる者に対し、厚生省令の定めるところにより、健康診査を行わなければならない。

- 1 満1歳6か月を超え満2歳に達しない幼児
- 2 満3歳を超え満4歳に達しない幼児

第13条 前条の健康診査のほか、市町村は必要に応じ、妊産婦又は乳児若しくは幼児に対して、健康診査を行い、又は健康診査を受けることを勧奨しなければならない。

表 2 現行の乳幼児健診

健康診査		実施方法	対象児の月齢・年齢	健康診査の種類
法に対象児の年齢が明記されている健診(第13条)	1歳6か月児健康診査	集団健康診査 または 個別健康診査	幼 児 (満1歳6か月を超え、 満2歳に達しない)	一般健康診査 歯科健康診査 精密健康診査
	3歳児健康診査	集団健康診査 または 個別健康診査	幼 児 (満3歳を超え、 満4歳に達しない)	一般健康診査 歯科健康診査 精密健康診査
その他の乳幼児健診(第12条)	乳 幼 児 健康診査	市町村保健センター等において行う集団健康診査	乳幼児	一般健康診査 歯科健康診査
	乳 児 健康診査	医療機関等に委託して行う個別健康診査	乳 児 (生後3～6か月に1回 と9～11か月に1回)	一般健康診査 精密健康診査

(母子保健法及び関係法令・通知<健康診査実施要項>等による)

表3 乳幼児健診（一般健診）の実施方法と実施時期

実施時期＝呼び出しや勧奨の対象となる月齢・年齢、個別健診＝医療機関委託による個別健診、通知＝はがきや文書による個別通知

【1】 乳児健診（1歳児健診を含む）

●集団健診の時期：2か月、3か月、4か月、6か月、7か月、8か月、9か月、10か月、1歳など

○個別健診の時期：1か月、2か月、3か月、4か月、6か月、7か月、9か月、10か月、1歳、0～3か月、6～12か月

「お誕生日前健康診査」＝10か月～誕生日前日、「お誕生（日）健診」：10～12か月、1歳～1歳3か月など

1) 集団健診のみ

1回：4か月など

2回：2か月・4か月。3か月・7か月。3か月・9か月。4か月・8か月。4か月・10か月。6か月・9か月など

2) 集団健診と個別健診

2回：●集団健診（4か月） ○個別健診（7か月）or（9か月）or（10か月）など

3回：○個別健診（1～2か月） ●集団健診（3か月） ○個別健診（9～11か月）

○個別健診（4か月） ●集団健診（6か月） ○個別健診（10か月）

●集団健診（3～4か月） ○個別健診（6～7か月・9～10か月）

●集団健診（4～5か月） ○個別健診（4～6か月・9～11か月）

集団健診と個別健診の時期は重複

●集団健診（4か月） ○個別健診（満1歳までに2回）など

3) すべて個別健診

2回：3～5か月・7～8か月。4か月・7か月。4か月・9か月。4か月・10か月、4～5か月・10～12か月など

3回：1か月（生後30～60日）・3か月（生後90～119日）・7か月（生後210～239日）
2か月・4～5か月・8～9か月。3～4か月・7～8か月・1歳。4～5か月・7～8か月・10～11か月。

4か月（生後120～149日）・前期（0～3か月）・後期（6～12か月）など

4回と幼児期1回の例：1～2か月・3～4か月・6～7か月・9～10か月・1歳～1歳2か月

【2】 1歳6か月児健診

●集団健診：1歳5か月～1歳6か月、1歳6か月、1歳6か月～1歳7か月、1歳6か月～1歳8か月で通知など

●集団健診：「1歳10か月児健診」＝1歳10か月～2歳未満など

○個別健診：1歳6か月～1歳11か月など

【3】 3歳児健診

●集団健診：2歳11か月～3歳、3歳～3歳1か月、3歳3か月、3歳4か月～4歳未満、3歳5か月～3歳8か月で通知、3歳6か月、3歳9か月など

○個別健診：3歳6か月～3歳11か月など

【4】 その他の乳幼児健診

●乳幼児健診：乳幼児対象（保健センターで予約制）

○2歳児健診：2歳～2歳2か月

【5】 特徴的な例

◎すべて個別健診の例：4か月、7か月、1歳6か月、3歳。4か月、10か月、1歳6か月、3歳

◎すべて集団健診の例：4か月、10か月、1歳6か月、3歳。

3～4か月、9～10か月、お誕生日、1歳6か月、2歳6か月、3歳6か月。

◎回数が多い例：乳児期4回、1歳、1歳6か月、2歳、3歳 計8回

表4 歯科健診の実施方法と実施時期

実施時期＝呼び出しや勧奨の対象となる月齢・年齢

【1】 1歳6か月児歯科健診

- 集団健診（一般健診と同時）：1歳6か月など
- 集団健診（一般健診とは別）：1歳6か月、1歳7か月、1歳8か月など
- 個別健診：1歳6か月など

【2】 3歳児歯科健診

- 集団健診（一般健診と同時）：3歳など
- 集団健診（一般健診とは別）：3歳、3歳6か月など
- 個別健診：3歳

【3】 その他の歯科健診

- 1) 1歳児歯科健診
 - 個別健診：1歳～1歳2か月
 - 集団健診（お誕生日健診）：10～12か月
- 2) 2歳児歯科健診
 - 個別健診：2歳～2歳2か月、2歳～2歳3か月など
 - 集団健診：2歳、2歳1か月など
- 3) 2歳6か月児歯科健診
 - 個別健診
 - 集団健診
- 4) 5歳児歯科健診
 - 個別健診：5歳、5歳～5歳11か月など

【4】 特徴的な例

- 回数が多い例：1歳、2歳、1歳6か月、3歳、5歳

表5 集団健診方式と個別健診方式の比較

【1】 集団方式

1) 長 所

- 一般の健康チェックと同時に、さまざまな専門職のチームワークによって、比較的短い時間に、多人数の対象児を総合的に診察、指導できる
- 郵送等で個別通知をする、未受診者を把握して受診勧奨を行うなどきめ細かく対応できる
- 必要に応じて、保健指導、栄養指導、歯科衛生指導、心理相談など専門職が個別対応できる
- 必要に応じて訪問指導、療育支援など、事後措置へつなぎやすい
- 待ち時間を利用して、小集団での保健教育ができる
- 医師の少ない地域でも医師を派遣して実施できる
- 統計処理がしやすい、など

2) 短 所

- 流れ作業的になりやすい
- 健診日・健診医を選択できない
- スタッフ間で指導内容の食い違いがあると親を混乱させる、など

【2】 個別方式

1) 長 所

- 健診日・健診医を選べる
- 必要があればそのまま診療に入れる
- 最寄りのかかりつけ医で、乳児期から継続的な発育・発達をチェックを受けられ、個別のニーズに応じた指導を受けられる
- 小児科の専門医の場合、一人の医師によって保健指導、栄養指導、心理相談などが行われ、総合的に指導できる
- 予約制の場合など十分な時間指導が受けられる（こどもの心の問題、母親の育児不安など）、など

2) 短 所

- 一般診療とは別に健診日を設ける必要
- 委託費用が多くなる
- 一般健診と歯科健診が別になる（受診率に影響する・食事の指導など関連した指導がしにくい）
- 委託先のない地域ではできない
- 事後処置へつなぐのが遅れることがある
- 行政側が健診の結果を把握するのに時間がかかる、など

医療機関 (個別健診)		保健センター（保健所） (集団健診・育児相談)	
胎児期 <u>プレネイタル・ビジット（小児科）</u>		(両親学級等)	
---- 出生（産科） ----		↓	
新生児期		← 新生児訪問	
↓		↓	
1 か月	<u>1 か月健診（小児科）</u>		
2 か月	<input type="checkbox"/>		◇
3 か月	<input type="checkbox"/>		◇
	<u>4 か月健診（個別健診）</u>	← and/or で受診できる →	● <u>4 か月健診（集団健診）</u>
5 か月	<input type="checkbox"/>		◇
6 か月	<input type="checkbox"/>		◇
	<u>7 か月健診（個別健診）</u>		● <u>7 か月育児相談</u>
8 か月	<input type="checkbox"/>		◇
9 か月	<input type="checkbox"/>		◇
	<u>10 か月健診（個別健診）</u>		● <u>10 か月育児相談</u>
11 か月	<input type="checkbox"/>		◇
12 か月	<input type="checkbox"/> お誕生健診		◇
	<u>1 歳 6 か月健診（個別健診）</u>	← and/or で受診できる →	● <u>1 歳 6 か月健診</u>
2 歳	<input type="checkbox"/> 2 歳児健診		◇
3 歳	<u>3 歳児健診（個別健診）</u>	← and/or で受診できる →	● <u>3 歳児健診</u>
4 歳	<input type="checkbox"/> 4 歳児健診		◇
5 歳	<u>5 歳児健診</u>		◇

← →：個別健診と集団健診のいずれか、または両方を受診できる
 個別健診で気になる点のある場合は、集団健診も受診するよう勧める
 ●：保健センター（政令市等は保健所）で個別健診の受診状況を把握し、
 未受診者で個別健診を希望しない人にはセンターの集団健診または健康相談を勧奨
 必要に応じて、福祉事務所・児童相談所等の担当者も立ち会うようにする
 □：必要に応じて医療機関（できれば小児科）で健診・育児相談
 ◇：必要に応じて保健センター等で育児相談（保健婦・心理相談員・栄養士など）を受ける
 ____：既に公費負担となっているものとそれが望ましいもの □についても検討を要する

図 1 乳幼児健診のスケジュール案

▼ 1 歳 6 か月健康診査

お子さまの健やかな発育・発達のために、山口市では1歳6か月になられたお子さまを対象に健診を行っています。

お子さまが1歳6か月になられる前の月に、1歳6か月児健康診査のご案内と健診票をお送りしております。

【受付時間】

13時～14時

【健診内容】

身体測定、歯科健診、小児科健診、保健相談、栄養相談、歯科相談、心理発達相談

【持参品】

母子健康手帳、健診票

【料 金】

無 料

※ 事前に健診票を送付しますので、必要事項を記入の上ご持参ください。
なお、健診日の2週間前になっても届かない場合は、山口市保健センターまでご連絡ください。

【地区別の健診日・会場】

(以下略)

(下線は筆者)

<http://www.city.yamaguchi.yamaguchi.jp/kenko/kurashi/16kenshin.htm>

図2 山口市の1歳6か月児健診（1歳6か月から受診の例）

1歳10か月児健康診査

※ 高知市では、お子さまの健やかな成長を願って1歳10か月児健康診査を実施しています。



健康や発達の状態を知り、もし異常があれば早く見つけ、治療や対応が手遅れにならないようにするとともに、食事や生活習慣など育児全般についての相談もお受けしています

○ お子さんが1歳8か月になりましたら受診票等をお送りします

受診方法

健診会場	高知市保健福祉センター2階 健診フロア(会場地図はこちら)
受付時間	13時～14時
対象者	1歳10か月～2歳未満の幼児
持参品	母子健康手帳、受診票、所見用紙、カリオスタット検査結果票、尿
要件	高知市に住民票を有する方

注意事項

- (1) 2歳のお誕生日以降は、受診できなくなります
- (2) 発熱や風邪等にかかっているときは健診を控えます
- (3) 健診は、2歳になる前日まで受けることができます。指定健診日でご都合が悪い場合は、健診日を変更できますのでご連絡ください。
(基本的には火曜日に実施していますが、お休みの週もありますので事前にお問い合わせください。健康づくり課 TEL 088-823-9436)

健診日程(平成15年4月～平成16年3月分)

平成15年4月8日(火)	平成15年4月15日(火)	平成15年4月22日(火)	
--------------	---------------	---------------	--

(以下略)

<http://www.city.kochi.kochi.jp/depa/11/1402/koshi/1sai10kagetukenisshin.htm>

図3 高知市の1歳6か月児健診（1歳10か月健診としている例）

▼ 3 歳児健康診査

お子さまの健やかな発育・発達のために、山口市では3歳になられたお子さまを対象に健診を行っています。

お子さまが3歳になられる前の月に、3歳児健康診査のご案内と健診票をお送りしております。

【受付時間】

13時～14時

【健診内容】

身体測定、尿検査、歯科健診、小児科健診、保健相談、栄養相談、歯科相談、心理発達相談

※8020健診：当日、希望されれば、保護者の方も歯科健診を受けることができます。

この機会に、受けてもらえてはいかがでしょうか？

【持参品】

母子健康手帳、健診票、お子さんの目・耳に関するアンケート
■尿検査がありますので、当日採られた尿を清潔な容器に入れてご持参ください。

【料 金】

無 料

※事前に健診票を送付しますので、必要事項を記入の上ご持参ください。

なお、健診日の2週間前になっても届かない場合は、山口市保健センターまでご連絡ください。

【地区別の健診日・会場】

(以下略)

(下線は筆者)

<http://www.city.yamaguchi.yamaguchi.jp/kenko/kurashi/3saikens.htm>

図4 山口市の3歳児健診（3歳0か月から受診の例）



山形市保健サービスのご案内

山形市保健センター

こどもの健診・検査
お子さんが元気ですこやかに育つために行っております。ぜひ、忘れずに受けてください。

3歳児健康診査（集団健診） （山形市では3歳9か月ごろ行っています。）

●日程

日 程	対象児（個人通知）
平成15年4月17日（水）	
平成15年4月22日（火）	
平成15年4月23日（水）	
平成15年4月24日（木）	平成11年7月生まれ
平成15年4月25日（金）	

（中略）

平成16年3月16日（火）	
平成16年3月18日（木）	
平成16年3月19日（金）	
平成16年3月23日（火）	平成12年6月生まれ
平成16年3月25日（木）	

※3歳8か月ごろに、3歳児健診のお知らせが個人通知されます。その時期が過ぎても通知されない時は保健センターに連絡ください。

●健診日、場所、受付時間等については、広報やまちが、毎月15日号に掲載します。

●山形市に住所を有し、第3歳を越え第4歳に達しない幼児で、3歳児健診を實施している市であれば受けつけることができます。
所要時間は2～3時間の予定ですが、その日の状況により異なりますので、あらかじめご了承ください。

●1歳6か月児健診・3歳児健診は、市内の医師に依頼してもらっています。医師の希望により、午前中は前日より休診が早いお子さんなどの診察にあたるため、健康な子を対象とした健診は、午後から行っています。ご了承ください

●1歳6か月児健診・3歳児健診は、小児科、歯科など複数の診療科目を同時にうけられるように、集団方式で行っています。またこの時期は、社会性（対人関係など）が育つ大切な時期です。保護者の悩みも顕微視しやすい場なので、保健師や栄養士による相談も行えるようにしています。

http://www.city.yamaguchi.yamaguchi.jp/kenko/inf_3saikens.htm



健康・福祉 Q&A

山形市保健センター

子どもの健診について

① 1歳6か月児健診3歳児健診はどうして午後からなの？

▲ 健診は市内の医師に依頼してもらっています。医師の希望により、午前中は前日より休診が早いお子さんなどの診察にあたるため、健康な子を対象とした健診は、午後から行っています。

② 1歳6か月児・3歳児健診の誕生日に行けない場合はどうしたらいいの？

▲ 1歳6か月児健診は、2歳になる前日まで、3歳児健診は4歳になる前日まで、健診を行っている日であれば受けられます。日程については広報やまちが15日号をご覧下さい。

③ 1歳6か月児健診では、集団で歯のお話がありますどうしてですか？

▲ この時期になると、いろいろなものを食べた、乳歯の数が増えたりなど、虫歯にかかりやすくなっています。そのため、歯の健康について話をしています。

④ 3歳児健診はどうして3歳9か月の時点での？

▲ 3歳児健診では、小児科・歯科診療の他に、耳の検査と、耳鼻科健診、視力検査を行っています。3歳9か月になると、多くのお子さんが、検査方法を理解して、また検診がスムーズなようになる時期になります。そのため山形市では、3歳9か月の時点でのご案内を行っています。

⑤ 4か月児・9か月児健診は個別健診なのに、1歳6か月児・3歳児健診はどうして集団健診なの？

▲ 小児科、歯科など複数の診療科目を同時にうけられるように、集団方式で行っています。またこの時期は、社会性（対人関係など）が育つ大切な時期です。保護者の悩みも顕微視しやすい場なので、保健師や栄養士による相談も行えるようにしています。

⑥ 乳幼児健診はどのようにするの？

▲ 山形市では、4か月・9か月・1歳6か月・3歳の時に健診を行っています。すべての健診で、身体測定や診察を行い、また心配事に対するアドバイスをしつらして、お子さんが健康に育つための応援をしています。

4か月児・9か月児健診では、小児科の診察

1歳6か月児健診では、小児科・歯科・耳鼻科の診察、目の検査

3歳児健診では、小児科・歯科・耳鼻科の診察、耳の検査などを行っています。1歳6か月児健診・3歳児健診では、保健師・栄養士の個別相談も行っています。日程や受診方法は、母子健康手帳別冊、広報やまちが15日号をご覧ください。

http://www.city.yamaguchi.yamaguchi.jp/kenko/inf_yndex2008.html

図5 山形市の3歳児健診（3歳9か月から受診の例）